

# 三步進んで、二歩下がり

9

## 父の臓器提供 いいねんな？

3年ぶりに会った父親は人工呼吸器がつけられていた。目を閉じたまま、呼び掛けても反応がない。

「私は人前で泣きたくない性格。でも父の姿を見ると、さすがに涙が出ました」。大阪市の福岡紗妃さん(29)の言葉に、私たちはじつと耳を傾けている。

福岡さんの父親は職場で倒れ、兵庫県内の病院へ救急搬送された。脳出血だった。

「私は3年前に父とけんかをして、家を出てしまったんです。それからは母と暮らしていました」。父親は福岡さん

の2歳上の兄と、神戸で生活していた。

その兄から連絡があり、福岡さんは父親が倒れたことを知らされる。「臓器提供の話と一緒に聞いてほしい」。兄は病院で、父親が脳死に近い状態で回復の見込みがないこと、臓器提供という選択があることを告げられていた。



脳死下の移植は心臓が動いている状態で死が宣告され、そのまま臓器が摘出される。父親は臓器提供の意思表示カ



臓器提供に向けた家族の話し合いを振り返る福岡紗妃さん＝大阪市内

ードを持っておらず、家族に判断が委ねられた。

「正直、体は傷つけたくないけど...」。母親が福岡さんと兄に語り掛ける。「移植を取り上げたテレビ番組を一緒に見たとき、『最後ぐらいは誰かのためにになりたい』って話してた」。父親のその言葉を尊重し、母親は「提供しようと思っ」と言った。

福岡さんも賛同した。「つらいけれど、どこかで役立つてほしいとも思っ。あまり

「意見、ご感想をお寄せください。手紙は、〒650-08571(住所不要)神戸新聞編集委員会「いのちをめぐる物語」係まで。ファクスは078・3660・5516へ。メールアドレスは、inochi@kobe-np.co.jp 吧。取材させていたたくともありますので、できれば連絡先を記してください。」

シリーズいのちをめぐる物語 第五部

悩まなかったな。なんでかなあ」と振り返る。

兄は臓器提供を避けたがっているようだった。ただ表立っては反対せず、母親や妹に「自分らがしたいならいいんじゃない」と繰り返していた。

福岡さんは「父は以前から体調が悪かったみたいです。兄には『病院に行かせておけば』という後悔があったのかもしれないですね」と気持ちを推し量る。



家族で2時間ほど話し合い、臓器提供を決めた。兄と母親が名前を書き入れた承諾書が、福岡さんに回ってくる。「ほんとに、ほんとにいいねんな」。2人に問い掛けると、兄が「するって言うてるやろ」と返した。

「署名はあえて最後にさせてもらいました。もやもやした気持ちか嫌で、全員が納得せなあかんと思ったんです」。翌朝、脳死状態かどうかを判定する検査が始まった。

それでも一歩の前進です。その瞬間は三步進んで四歩下がったように感じて、もう少しだけ長い目で見れば七歩進んで五歩下がるとも考えられる。そのタイミング、タイミングで自分が考えていること、面白いものですね。

神戸新聞分